

月経状況調査にもとづく婦人科相談の一考察

長崎大学保健管理センター

大坪 敬子 前田 真由美

鷺池 トミ子 石井 伸子

長崎大学医学部附属病院産婦人科

河野 雅洋

I. はじめに

月経は、女性のライフサイクルにおける健康を考える上で重要な要素である。近年、月経痛・月経周期のみだれ等のトラブルや、妊娠を疑って相談に来所する学生が増加し、また健康相談の中で婦人科疾患を疑うケースもあって、月経・性について適切なアドバイスの必要性を感じるが多くなった。

そこで、平成8年度より、隔週水曜日の午後2時～4時までの2時間、婦人科医による婦人科相談を開設した。相談開始にあたり、新入女子学生の月経に関する調査を実施し、それをもとに、婦人科相談及び指導のあり方を検討したので報告する。

表1 アンケート

1. あなたの初潮年齢はいくつですか
()歳 ()ヶ月、まだない
2. 月経周期は何日ですか()番号を記入
①24日以内 ②25～38日
③39日以上～3ヶ月未満 ④3ヶ月以上
3. ④と答えた人に対して
無月経の期間はどれ位ですか()ヶ月
4. 月経持続日数は何日ですか()
①2日以内 ②3～7日
③8日以上 ④不定
5. 月経痛がひどい方ですか()
①はい ②いいえ
6. 月経時、薬をのむことがありますか()
①はい ②いいえ

II. 調査対象と方法

対象は、平成8年度入学の女子学生662名である。

方法は、新入生健康診断時の、心の相談に用いる心身の健康に関するアンケートの中に質問項目(表1)を追加し、健康診査時に回収し調査した。学校医(産婦人科)に相談し、月経周期39日以上のを抽出の上、電話連絡及び手紙による相談来所を勧奨した。電話にて本人と直接話せる場合は、月経周期を中心とした現在の月経状況を把握の上、婦人科医の相談を受けるよう動機づけし予約をとった。手紙では、調査による月経周期からみると、婦人科医の相談を受けた方が望ましいのでセンターに出向くよう勧め、婦人科相談へと結びつけた。

医師による婦人科相談は、問診を主とし、基礎体温曲線の判定や必要に応じてホルモン検査や超音波検査を実施した。

III. 結果及び考察

1) 月経周期異常の頻度

アンケートに回答があったのは658名(99.4%)であった。

表2 月経周期異常

周 期	人数	(%)
頻発月経(24日以内)	43	(6.5)
稀発月経(39日以上)	35	(5.3)
無月経(3ヶ月以上)	9	(1.4)
不規則	4	(0.6)
合 計	91	(13.8)

今回の調査では、表2に示すとおり、24日以内の頻発月経43名、39日以上稀発月経35名、3ヶ月以上の無月経9名と、自己記入の不規則4名を含めて合計91名(13.8%)に周期の異常がみられた。残りの86.2%が正常範囲とされる25~38日周期であった。

尚、これまでの報告(表3)と比較してみると1985年の本庄の報告では、看護専門学生で10.1%、女子大生で16.0%¹⁾であり、1990年報告の大阪教育大では2年生以上の調査で21.5%²⁾、お茶の水女子大で1990年・91年と2年間調査し12~16%³⁾であった。

今回の13.8%は、これまでの調査に近い結果であったが、調査時期が入学時であるため入試のストレス等により、周期の乱れが生じた可能性も考慮すべきと考える。

2) 連絡方法と受診状況

婦人科相談への勧奨は電話と手紙の2つの方法をとった。

電話では、29名中17名(58.6%)の受診があった。一方手紙では、19名中13名(68.4%)の結果を得た。電話の場合、本人不在のた

め直接話せず家族からの伝言ということも考えると両者の間には差はないものとする。通常学生への連絡は、各学部別掲示による方法をとっており、それによる受診率は約3割程度である。それからすると、今回の連絡方法では、全体で30名、62.5%の高い受診を得た。

3) 婦人科相談および精密検査の結果(表4)

相談の段階で診断がついた者、また医療機関での精密検査実施後に診断がついた者の結果を表に示した。

相談時に正常月経へと改善した3名を除いて、27名に何らかの異常を発見できた。その内訳は過長卵胞期12名、多嚢胞性卵巣症候群6名、視床下部性無月経4名、体重減少性無月経3名、過多月経・月経困難症がそれぞれ1名あった。

月経周期が39日以上3ヶ月未満の稀発月経であっても、多嚢胞性卵巣症候群のように無排卵の症例もみられた。たとえ月経を認める場合であっても、稀発月経である場合は精密検査が必要であることがわかった。

表3 月経周期異常の頻度に関する報告

	対 象	人 数	発生頻度
本庄英雄 (1985)	看護専門学生	307	10.1%
	女子大生	257	16.0
大阪教育大 (1990報告)	大学2年生以上	442	21.5
お茶の水女子大 (1990・1991)	大学1年生	不明	12~16
本調査 (1996)	大学1年生	658	13.8

表4 婦人科相談および精検結果

診 断	月 経 周 期			人数 (%)
	39日以上	3ヶ月以上	不定期	
過長卵胞期	10		2	12(40.0)
多嚢胞性卵巣症候群	3	2	1	6(20.0)
視床下部性無月経		4		4(13.3)
体重減少性無月経		3		3(10.0)
過多月経	1			1(3.3)
月経困難症	1			1(3.3)
異常なし	2	1		3(10.0)
合 計	17	10	3	30(100)

表5 異常者の治療状況

診 断	要治療	要観察
過長卵胞期		12
多嚢胞性卵巣症候群	6(2)	
視床下部性無月経	3(1)	1
体重減少性無月経	2	1
過多月経	1	
月経困難症		1
合 計	12	15

() は治療中断者

表5に示すとおり、今回の相談結果、要治療となった者は12名で、基礎体温測定・鎮痛剤服薬指導・体重増加指導で要観察となった者は15名であった。治療内容は、排卵誘発を目的としたクロミヘフェン療法及びクロミヘフェン療法にドーパミン作動薬療法を併用した者8名と、過多月経1名には鉄剤処方を行った。

要治療の中にも治療を中断する者がみられるため、医療機関との情報交換により、ドロップアウトの者を防ぐ必要性を感じた。

4) 看護婦としての対応

看護婦としての主な対応としては、受診した30名全員に基礎体温測定の意義・方法について指導後、基礎体温測定記録用紙を渡した。また、体重減少性無月経や過多月経の学生4名については、食事調査、食事指導を行った。さらに、月経痛を訴えた学生3名に対して、鎮痛剤の服薬方法や、月経痛緩和の方法について指導を行った。また治療中断者への受診の勧め(5名)や症状の変化に対する不安へのカウンセリング(6名)も実施した。この中で、基礎体温測定の記録用紙を渡し、夏休み後提出するよう勧めた学生18名のうち実際に提出したのは5名、食事指導を行った学生についても食事記録を提出したものは3名中1名と、約3割の学生にしか実際の取り組みは見られない実状であった。

いかにして必要性を理解させ、自己の健康管理の一方法として学生が取り組むよう対策を講じるか、健康教育をすすめる中での大きな課題と考える。

今回の月経状況調査は、記入段階で自己の月経のあり方を認識させ、さらに月経周期の異常がみられる学生を、積極的な受診勧奨により、婦人科相談に結びつける目的を果たした。相談に応じた学生に対しては、基礎体温測定や超音波検査・ホルモン検査等の精密検査を通じて、自分の体のサイクルや月経のメカニズム、ホルモンの働き等を理解させられたのではないかと考える。また、基礎体温測定が、無排卵の早期発見・早期治療に役立ち、ホルモンのバランスを知る手がかりになることを説明し測定を体験させたことは、自己の生殖機能の働きについて関心を高める手助けとなったのではないかと考える。その一方で、受診勧奨に応じない学生や、「月経のないほうが、わずらわされなくてよい」等、自覚を持たない学生が多いことも認識できた。また、看護者自身も、特に女子学生の健康問題を考える時、月経状況を注意深くとらえる態度が生まれたことは良かったと思う。

IV. まとめ

1. 1年次の女子学生に月経状況調査を実施し、周期異常が91名(13.8%)に認められた。
2. 月経周期39日以上の48名に受診勧奨を行い、30名(62.5%)が受診した。
3. 受診者30名中27名に過長卵胞期、多嚢胞性卵巣症候群、その他の異常を認め、そのうち12名が要治療と診断された。
4. 基礎体温測定指導や食事指導を行ったが、実際に記録や調査結果を提出した学生は約3割と少なかった。

今回、指導及び対応の結果を評価することは困難であったが、今後学生に対して自己管理の必要性を説明していくことが、重要な課題と考えられた。

V. おわりに

今後も、婦人科医の協力を得て、女子学生にライフサイクルの基本である月経と上手につきあってゆく手助けとして婦人科相談を継続し、広く学生全体が性に対する認識や知識を深めるとともに、リプロダクティブヘルスをめざすよう段階的に働きかけて行きたいと考える。

参考文献

- 1) 本庄英雄：思春期の月経異常と取り扱い方，産婦人科治療 VOL. 60 NO. 2 P.150-155 1990
 - 2) 朝井均他：大教大学生の健康調査－女子学生での月経の実態について，第28回全国大学保健管理研究集会報告 P.172-174 1990
 - 3) 堀口雅子：女子大学生に見られる月経異常とその管理－特に体重減少性無月経について，第29回全国大学保健管理研究集会報告 P.86-90 1991
 - 4) 五十嵐正雄：月経とその異常，金原出版
 - 5) 麻生武志他：思春期・若年期の月経異常とその取り扱い方，飯塚理八編，産婦人科MOOK NO.2 月経異常 P.15-26，金原出版 1984
 - 6) 松本清一：月経に関する意識と行動の調査，MSG研究会 1990.7月
 - 7) 高村寿子：これからの月経教育，思春期学 VOL.9 NO.4 P.387-395 1991
 - 8) 石丸忠之他：思春期のやせに関する問題，思春期学 VOL.5 NO.1 P.51-54 1987
 - 9) 山辺晋吾他：若年婦人の月経に関するアンケート調査，－2,708人の分析結果より－，日本不妊学会雑誌 第32巻 第3号 P.71-77 1987
 - 10) 丹羽 健：若年女子の月経周期と自覚症状（月経随伴症状）セクシャルサイエンス 1巻 10号 P.63-68 1992
 - 11) 川端和女他：大阪教育大学における婦人科相談の現況－月経異常を中心として－，大阪大学紀要 第III部門 第44巻 第2号 P.219-225 1996
- （本論文の要旨は第35回全国大学保健管理研究集会で発表した。）